『結びすてたる枕の草葉』補正

簗瀬一雄

一

筑摩書房版『本居宣長全集』第十八巻には、本居宣長記念館所蔵の宣長自筆再稿本が収められ、その解題には、初稿本および嘉永七年刊本との関係、相違点が記述されてゐる。しかしながら、この記述中には、二件の誤りがあるので、まづそれを指摘し、次に植松有信旧蔵本によつて、諸本に欠けたまゝになつてゐる歌会の記録を補充することとする。この他にも、起・清洲の記事の不足が残るが、前者は加藤磯足、後者は鬼頭元吉・早川文明にかかはるものであるから、何とかして捜し出したいと思つてゐる。

二

(1)全集の解題に、初稿本には存して、再稿本には見えないとしてゐる十二首の中の左の一首（四五頁）は、再稿本（三八七頁）に存する。照合の時の見あやまりである。

「大井川」の題詞のある二首中の一首

さしくたすいかたともしも落たきつとなせ見つらんいかたとも

しも

(2)全集の解題（四七頁）に、

再稿本の四月二十一日、名古屋の舞津の里に人々が集まって歌を詠んだという題詞のある宣長の歌のあとに、「人々の此日の歌共はうつしもらしたり、今たつねて末に書へし」とあって、巻末に、初稿本には無い二十七首の歌を補ってあるのは、その最も顕著な例である。

とある。「その最も顕著な例」といふのは、「要するに初稿本は未定稿であって、再稿本において整然と構成され、定稿として完成されたのである。」を受ける言葉であるが、こゝには大きな誤解が介在してゐるのである。この二十七首は本文の三九七頁下段から三九九頁上段までの歌を指してゐる訳であるが、これは尾張の門人の詠と、それに関係する芦庵・龍麿の歌を集めたものであり、紀行文の本体部の中に入れるのは具合が悪いとして、巻末にまとめられたものである。この内容を見れば、それが四月二十一日の歌会に関係の無いものであることは明らかである。ことに最後の四首は『結びすてたる枕の草葉』を借覧した長谷川常雄の感

想歌である。かうしたものを。前引のやうに解説されたのは、実に不審である。

三

『結びすてたる枕の草葉』には、

廿一日伊藤公字平左衛門彝のなり所に舞津の里に人々つとひて歌よむ

兼題待郭公　宣長

声きかはなみたかさむとまつ陰の雫かひなき山ほとゝきす

さくり題更衣

かへていかにうれしからまし忘られぬ花の香とりの衣なりせは

人々の此日の歌共はうつしもらしたり今たつねて末に○書へし

および、

廿四日おのかやとれる家に人々つとひて例のよむ兼題橘　宣長

さす月も昔ににたる夕風に袖の香きほふ軒のたちはな

さくり題新樹

深みとり桜にふくも今は又風なつかしき夏木立かな

此日のも人々の歌はうつしもらせり尋ねてかくへし

といふ、注を付した記事（三九四頁）がある。この前者を、全集の解題は誤つて巻末の二十七首が当るものとしたのであるが、その不可なることは、前項に指摘した通りである。

さて、昔、植松家から鈴の屋遺跡保存会へ寄贈された資料の中に、植松有信旧蔵本の『結びすてたる枕の草葉』があつた。そして、その巻末に、四月廿一日および廿四日の歌会の言録が合綴されてゐるのである。この記録の筆者は未詳であるが、前掲の宣長の歌が一致するので、両日の記録と断定できる。まだ本居宣長記念館が建設される前に、これを撮影しておいたのであるが、先に『横井千秋覚書』に於て、千秋の歌を蒐集した当時は、この写真をしまひ失つてゐた為に、こゝに見られる四首は加へなかつた。この中の葵の一首は短冊から取り上げたので、他の三首が新出歌といふことになる。いづれ『横井千秋研究補遺』に加へる予定であるが、とりあへずこゝに報告しておく。又、「大矢重門の歌集と拾遺歌」の執筆時にも本書を加へなかつたので、ここに見る重門の歌は新出である。本書はかなり蝕欠の多いものであるが、出来るだけ判読した。

四

前津東園会兼題

待郭公　宣長

声きかはなみたかさんとまつ陰の雫かひなき山ほとゝきす

千秋

たちはなの陰にわれたち郭公まつとつけこそ花の夕風

千足字熊吉

よるもねすかはかりまつとつけやらんたつきもしらす山ほとゝきす

元吉鬼頭新左エ門

いつとてもちきりおかねと足引の山ほとゝきすまたぬ夜そなき

幸久

こよひ又きかてあけなはほとゝきすあすの夜とたにたのまれなくに

正祐

ゆめさめていまやきなくとほとゝきすこひつゝまてと一声もせぬ

龍麻呂

ふりいてゝなれもなかなむほとゝきすむら雨そゝく雲のまよひに

宣経 宇源兵衛

ほとゝきすおのかはつ音のつれなくてこよひもあけぬ横雲の空

真実 鈴木仙蔵

ほとゝきすこよひもなかて山かつらかけてもまたぬ鳥かねそうき

元貞 山脇和泉

ほとゝきす来鳴さ月のちかけれはまたぬまそなき朝よひことに

宗則 堀田半右ヱ門

ひとこゑもまたなかぬかなほとゝきすまつにねぬよのかすはつもれと

正雄 川村九兵衛

ふりいてゝなきこそせめとほとゝきす待につれなきむら雨の空

忠基 鳥居喜八

おしなへて里のうの花咲にけりやまほとゝきすなとか来なかぬ

文中 加藤文中

よもすからまつにつれなきほとゝきすあり明のそらに一声もかな

公彝 伊藤平右ヱ門

あり明の月にもなかぬほとゝきすいつをまつとてつれなかるらむ

大平

まちわたるそらにもらさはほとゝきすほのかなるねもさたかならまし

牡鹿輔 松岡鹿助

待かひもなつの夜ことに一こゑもきかてそあくる出ほとゝきす

了榮 常瑞寺

契りおきしはつねならねハ此ころは山ほとゝきすまたぬよそなき

致陳

時鳥まつ夜ふけゆくやまの端の月もつれなしひとこゑもせて

文明 早川清大夫

ほとゝきすなかぬはつねをまつよはのこゝろそそらにあくかれにける

直亮 大橋丹治

しひてまつわれにはもらせほとゝきすまた世にしのふ初音なりとも

正古 川村龍助

さたかなるはつねきかむ(マヽ)は時鳥幾夜をふとも待そあかさん

将聴 文内

まちわひぬ我にはもらせ時鳥さこそはしのふ初音なりとも

高門

時鳥さそふしるへにたちはなのかをゆふ風にたくへてそやる

当座

更衣

宣長

かへていかにうれしからましわすられぬ花のかとりの袂なりせは

卯花　将聴

晴くもる月と見ゆるはうのはなのさけるさかさるかきねなりけり

葵　千秋

あひにあひて葵のつゆの玉たれの小簾もみとりの色のすゝしさ

早苗　千足

うゑわたす早苗なみよる夕されはすゝしさまさる田子のう□(らカ)かせ

菖蒲　文中

けふといへは軒にあやめをふくからに草のいほりもいろそそひける

軒橘　元吉

思ひいてゝむかししのへとさみたれのしつくにほふのきの立はな

樗　幸久

さなへとる比にそあるらし我宿のあふちの花の今さかりなる

五月雨　宣経

きのふけふ水かさまさりてあすか川淵瀬ともなきさみたれの空

水鶏　正雄

天の戸もたゝく水鶏におとろきてはやくやあくる夏の夜の空

夏月　元貞

夏ふかみ水枝さしあふ木の間よりはつかにてらす月のすゝしさ

罹麦　高門

秋の野の千草の花にさきたちてなつよりにほふやまとなてしこ

夏草　公彝

ふみわけし跡こそわかねなつ草のしけく生たるのへのかよひ路

鵜川　真実

玉島や川瀬すゝしき夕風にいきつきのほるうかひふねかな

照射　宗則

ますらをの幾夜やま路にともしてよりくる鹿を待あかすらん

水辺螢　正祐

遠近のみつのうへにもかけみえてきしによる〳〵とふほたる□な(かカ)

夕顔　正古

よそめにもそれとわかれてしつか屋の軒しろたへにさけるゆふかほ

蚊遣火　牡鹿輔

軒端もる月にはつら□賤(きカ)か家のかやりのけふり空にくゆりて

池蓮　致陳

すゝしさは水草を払ふ夕かせにつゆの玉ちるいけのはちす葉

氷室　文明

立よれは夏をわするゝ氷室やまかせも身にしむ杉の下かけ

夕立　了栄

きそひゆく風にきほひてむら雲のかたへははるゝゆふたちの空

納涼　直亮

風の音に秋をならしてならの葉のそよくもすゝし夏の夕暮

夏山　忠基

しをりせし木々の梢そしけりあひて花□なこ(のカ)りも夏の山のは

雨後蟬　龍丸

夕立のはれてもそれとまかふかな木すゑにしけきせみのこゑ〳〵

××　××

橘　宣長

さす月もむかしにゝたる夕風にそての香きほふ軒のたち花
元貞山脇和泉

あるしこそ先しのはるれ山さとの柴のあみ戸にほふたち□(花カ)
将聴神守村　文内

むら雨のなこりのつゆにふりしよをかけてそしのふ軒のたちはな
宗則堀田半右エ門

見ぬ世までかけてしのへと玉すたれひま□(よカ)りにほふのきの立はな
重門美濃国大垣人大矢仁左衛門

にほふより千代のむかしもみしか夜の夢のたゝちにかよふたち花
真実鈴木仙蔵

雨そゝくはなたち花にはたつみ流のすゑも香やにほふらむ
龍丸遠江国細田村石塚安右エ門

たち花のはなさく比はぬは玉の夢もむかしのほかならぬ哉
千秋横井十郎左エ門

橘の木すゑにのこるこそのみのひかりてりそふはなのあやしさ
文明清洲駅早川清大夫

むら雨の露ふきはらふ夕風にのきのしつくもにほふたちはな
元吉問駅鬼頭新左□(エ門カ)

ねさめしてむかしおもへ□(はカ)なつかしくまくらにかをるやとのたち花
在雄新井宇兵衛

おしなへてしけるあを葉にいち白くにほひわかるゝ庭のたちはら
公彝伊藤平右エ門

むら雨の露もかをりて立はなの花ちりみたるのきのゆふ風
しかすけ松岡鹿助

手枕のゆめもむかしをみつる哉花の香かよふのきのたち□(はなカ)
高門木田村大館左市

はれわたるあめのなこりの風過てしつくもかをるのきの立花
朗鈴木常助

思ひ出しむかしもおもひやられけり花立□(花カ)の香にほふころ
正祐

我やとの花たち花□(はカ)さきにけり色香をしらむ君に見せはや
千足

なく鳥の声も昔やしのふらむしのふのさとのたち花のえた
致陳

なか〳〵にねさめうれしくにほひ来て枕になるゝ夜半の立花
忠基鳥井嘉八郎

月清みそらなつかしく吹風によふかくにほふ軒の立はな
文中医師伊藤文中加

軒ちかくはな立花のにほはすはかくはむかしをしのはさらまし
正雄川村九兵衛

あれはてゝふりぬるやとに匂ふ哉昔しのふる軒のたちはな
幸久山田新助

いにしへにいかなる人の袖ふれてかくなつかしきのきのたち花
正古川村穂助

いにしへ□(をカ)おもひつゝくる手枕になほしのへとやかをるたちはな

当座

新樹　宣長

ふかみとり桜にふくも今はまた風なつ□(かしカ)きなつ木立かな

葵　文中

いつよりかそのかみ山のあふひくさ八十うち人のかさしそめけむ

郭公　正雄

たつねいりしみやまのおくは音もせてかへるふもとにきくほとゝきす

五月雨　正祐

水まさる川への草葉おひそひて露さへふかきさみたれのころ

夏月　高門

瀬を清みうつれる月も山河のはやくあけゆく夏のよはかな

夏草　文明

分なれしその通路もこのころはまよふはかりにしける夏くさ

螢　公彝

みやきのや木の下やみも名のみしてすたくほたるのかけは見えけり

夕立　千足

夕立のそらさりけなく入日さす峯の木すゑの色そすゝしき

納涼　元吉

立□(よカ)りてしはしすゝまむ山川のおとい□(さきカ)よきせゝのしらなみ

夏滝　龍丸

たちよれはあつさもなつの衣手につゝみてゆかむ滝のした哉

夏衣　元貞

陰ふかきな□(らカ)の葉わけの夕風にたもと涼しき夏衣かな

夏天象　直亮

夏の日は□(ヨメズ)なれそらも時の間にゆふ□(たつカ)雲の峯そあやしき

夏地儀　致陳

分行はあしたの露にみたれあひてみちも草葉のしけき野へかな

近恋　千秋

天雲の八重雲へなる山よりもひとへの小垣こえそかねつる

遠恋　重門

ほと遠みあはてへたつる年月に面影さへもとほさかりつゝ

稀恋　正古

まとほなるよ半のちきりは中〳〵にあはぬにまるさおもひなりけり

厭恋　宗則

かけておもふかひこそなけれ夏ひきの手引のいとのいとはるゝ身は

鶴　朗

みつしほにあしへをさして鳴たつの声吹おくる和歌のうら風

田里　しかすけ

笘をあらみ小田守いほに月もりて心もすめる秋の夜の空

関　将聴

ふりす□(ヨメズ)えも過やらぬ清見か□(たカ)□(ヨメズ)めやせきのとさしなるらん

羇旅　さき久

立いてゝ日数へぬれはたひころもきつゝなれにしほとをし□(そおもカ)ふ

懐旧　まさね

ことの葉の道たとらすはおほ御代の遠きむかしもいかてしらまし

（昭和五十二年十二月二十五日）